

詩同人誌評

第10回

雪解けを待つ

中塚鞠子

この世を去るのか
最後は気体となって空中に消え
亡骸は骨と灰になって壺に拾われる

何処までが人間

黄泉の界もあるという

仏の箴言にのせられて

あなたは苦行へ旅立つ

「イマヤルベキコト ヤラネバナラヌ
生きて居るから」

※三歳の時戦争 母の死負おんぶの記憶より

と※で注釈がついている。小さい時の一瞬の記憶が、今も強く残っているのであろう。もう戦争をじかに記憶している人も少なくなつた。語り継いでいかなければと思う。

石毛拓郎「鮫鯨の哀しみ」(飛脚43号)

……2023・12・8「開戦」忌念日への恨歌として

……深海に生きる魚族のように

自らが燃えなければ 何処にも光はない

(海人)

明石海人が 人の日の 病の底で詠んだ

歌の骨格は 失われて……

下総鹿島灘から這い出た 鮫鯨のぬめる裸

体は

冬場になると

競い合うかのよう

母屋の縁側の軒下に 吊るされる

……あんこうや孕み女の吊るし斬り(漱石)

よく 私は聞かされたものだ

夏場には 戦没兵の亡霊となり

かしらの提灯に 火を灯して

この時とばかりに 解体に 腕をふるう女

衆(おんなら)は

失われた火の玉を 呼びおこす

風の強い 夜なべには

ケタケタ カタカタと笑い

その鮫鯨の骨は 燃え盛り

火の玉となって

二度と還らぬ 男衆(おとこら)の芯骨が

おんならの枕頭で 踊るんだとよ

(略)

それはまだここにも出るし、そこにも出る

どこにでも現に……と書く。戦争で海の底に

沈んだ亭主を待っている女たち、働き手を失

った女たちも、辛いだらうが、可愛い女房を

残して海の藻屑となった男たちの情念が鮫鯨

となって火を灯す。骨だけになって吊るされ

た鮫鯨の骨の寂しい姿を見たことがあるがこ

んな激しい情念と怨念を入れ込む作者の筆力

神谷毅「生と死」(潮流詩派)276)

人間の形の瞬時まで

あなたは沈黙のまま

目を納め口は半開きのまま

はずごいと思う。

高丸もと子「抱きしめる」(「イリヤ」24号)

春を待つ球根が
一晩で掘り起こされていた

物音がしなかった山小舎の夕べ
ひっそりと生き延びているものが
ここを掘り当てた

このわずかな球根で
どれだけの空腹を満たせるのだろうか

でもここは星がこぼれるほど美しい
いくら美しくても

空腹を満たすことはできない
そう思って

今も戦火の中子どもを探し
抱きしめているひとがいるのだろうか

抱きしめる、というタイトルで、球根が最初に出てきてびつくりする。でも、食べるということは嬉しいことだけれども、悲しいことだ。食べられないと人も動物も死ぬ。戦火の中で子どもを抱きしめているひととも、空腹を抱えて空を見上げているに違いない。

神次郎「沈黙のメッセージ」(「軸150号」)

謎の画家 バンクシー
彼の絵に言葉は無用

少年が大男を投げ飛ばす姿は
ウクライナの切手となり

沈黙のメッセージは世界中に伝わった
破壊された白い壁のキャンパスの前で

「さあ 次はおまえたちの番だ」と
スプレー塗料で汚れた人差し指を
突き付けているのだ

俺たち 詩を書く者たちに向かって

少女に投げ飛ばされたプーチンが、柔道は勝ち負けではない、と哲学を語った、という記事を読んだ覚えがある。しかし作者はそんなことは言わない。俺たちに向かって、次はおまえたちの番だ、と指さしているというのだ。さすが、詩で戦おうとしている作者だ。

正岡洋夫「巨大な鳥」(「RIVER」192号)

屋根裏にある私の部屋には
横に長く伸びた古い窓があり

(略)

窓の外でしきりに鳥の鳴き声が出た
百舌鳥のような甲高い声のように聞こえた

が
次第に声は低く太い声になって近づいてきた

屋根の上でガーガーと鳴き続けていた

(略)

ガーガーという太い声が

戦争が来るぞ、と言っているように聞こえた

昔ここに住んでいたような親し気な表情で

(略)

戦争が来るぞ、戦争が来るぞ

そんな声で空いっばいに鳴いてから

青いブリキのような羽根を広げて

鳥は飛び立とうとしていた

黄色い嘴で青い羽根のこの不気味な鳥は私の部屋に入ってきて、新聞を食いちぎったりして出ていくのだが。この巨大な鳥はなにを象徴しているのだろうか。凶事を予知して伝える者なのか、伝えて恐れを煽る者なのか。天使か悪魔か、それは読み手の自由であるが、「阿Q正伝」の「革命がくるぞ」という叫びを思い出した。

外界は自分ではどうにもならない鬱陶しいことに満ちている。ギターを奏でながらブルースでも歌いますか。

えみり「人生のブルース」(「りんごの木」
65号)

ねえ
ちよっと そばに坐りなよ
しばらく

悲しいことは 忘れたいのさ
昨日の涙は 隠さないよ

楽しいことを 話そうか
生きるって たしかに大変さ
あいつがいなくなったのさ

昨日の朝
置手紙一枚残して
「さよなら 幸せになりなよ」
だつてさ

(略)
あいつは本気さ
「元気で暮らせよ」
だなんて 私は壊れそうだよ

(略)
なんかどこかで聞いたような歌になりそう
だけど、シャンソンでもブルースでも、心に
沁みる詩なら歓迎ですよ。腹を立てたり、希
望をもったり、フレーズが入り乱れていると
は思うけど、心が入り乱れているから、ちょ
っと水割りでも飲んで、ギターをかき鳴らし

てると思えばいいでしょう。

三角みづ紀「不在の人」(「caga」26号)

目が覚めたら誰もいない
二日分の衣類を洗濯して
生きるため
天気予報をながめていた

日々、すこしずつ
みずからを捨てていった
皮膚を裂いて袋におさめて
ごみ捨て場に置きに行く

孤独をあいつしているが

この世界に
ひとりきりだつたら
孤独すら失つて

(略)
喧噪のなかにだけ
孤独が存在していて
さみしいという言葉を伝える
その顔がない

不在を、皮膚を裂いて捨てていき、裸にな
った魂が感情を忘れていくと表現する、恐ろ
しいほどのこの孤独感。都会の街の中ではこ
うした人がすれ違っているのかもしれない。

号)
崎田きよ子「光があれば」(「天秤宮Ⅱ」3

ついつい数えてしまうのです
引き算ばかりが得意です
ない 無い ない
ないもの数えて
人と比べて

とうとう真つ逆さまに落ちてきた
暗い海の底で数えるものは何ですか
(略)

遠い昔に教えてもらったこと
深海に住む魚は
自分が放つ光だけが頼りだと

わたしにも光がありますか
微かなひとすじの光が見えますか
漆黒の闇の世界で
静かに灯す己のあかりで生きていきますか

何とも爽やかな言葉である。若い方なのだ
ろうか。私は、こんなに生真面目に人生を考
えてきただろうか、と考えてしまう。

山本美重子「ある日のぼくの脳」(「CAGA」
88号)

ある日僕は蟻を一匹殺した 僕の居住場所
である畳の上に黒い点が這うのを見つけた
ときだ 条件反射で人差し指が蟻を押しつ
ぶしていく ぼくの脳は罪悪感とともに今
日一匹の蟻を殺したと記憶した 翌日も蟻
は僕の前にやって来た(略) それから蟻は
一匹二匹毎日のようにとやって来て 黒点
として視界に現れては僕を翻弄していく
目で蟻の行動を追いながら捻りつぶす機会
をうかがっているうちに ぼくの脳は(略)
今日は三匹の蟻を殺したと記録していた

(略)

ここで全文を紹介するには頁が足りない。
問題は、殺したことを脳に記録したことにあ
る。ある日無数の蟻を見つけ、撃退できな
いけれども、脳にはたくさんの蟻を殺したと記
録されるのである。ある時から、脳に記録さ
れたすべての蟻が動き回り、眼球にも姿を現
し黒い斑点の数は増える。という面白い詩で
ある。最初の一匹の時罪悪感とともに、とあ
る。ちよつとしたきっかけを利用して面白い
も取れるし、深層心理の詩とも取れて面白い
と思つた。

十河裕子「ララバイ」(「アリゼ」218号)

降りたことのない駅に降りてみる

「千船」

美しい駅名に誘われて

(略)

千隻もの船は何処だろう

ここからは海は遠い
はつとするほど冴えた月が

頭上から見下ろしている

「生まれたくなかった」

産んだものに対してだけは

言う権利があるとばかり

私の娘は言うのである

久しぶりに

子守歌でも

歌ってみようか

ちよつと思春期だろうか、小学生か中学生

かも。悩みを抱いて母に訴える娘を抱えて、

母はやり切れない気持ちで、ふと、見知らぬ

駅に降りる。そんな母の気持ちがよく出ている。

タイトルが「ララバイ」で単なる子守歌とい

うより慰める歌の感じがでている。

田中裕子「すくう」(「PO」191号)

夢の中でも眠っていた

まっくらな中

強い菊の香りがすーつと

(略)

わたしはひどく弱っていた

その匂いからだをぐうつと沈められ

夢の中の眠りに

さらに深くふかく

ねむった

遠い地で祖母が

朝の井戸から汲んだ水と菊を

道の観音様に備え続けてくれたこと

あとで知った

(略)

観音様とあなたの生まれた日は

一日違い

惜しかことはなか

ずれたけん、あなたは人間になったとばい

(略)

眠りのはるか上方の水面を破って

誰かの手がすくう

(略)

夢の中で道を知ったようにやって来た強い

菊の香り。それを吸い込んで眠り、救われる。

おばあさんが観音様に自分が作った菊の花を

供えて祈り続けてくれていたのだ。方言が活

きていて、おばあさんの愛と信仰が伝わる。

【受贈詩誌】

- 「ア・テンポ」64号・「アリゼ」218号・「イリヤ」24号・「いろはにはへど」七周年記念号・「KAIGA」124号・「gaga」26号・「GAGA」88号・「風のたより」26号・「黄蔷薇」222号・「木立ち」冬147号・「軸」150号・「Z記」9号・「玉蘭」10号・「多島海」44号・「潮流詩派」276号・「天国飲屋」4号・「天秤宮Ⅱ」3号・「栃木県現代詩年鑑」二〇二三年版・「飛脚」43号・「百花」創刊号・「笛」304号・「PO」191号・「三重詩人」264号・「宮城の現代詩」二〇二三年・「Messe」62号・「RIVERE」191号・「りんごの木」65号